『20世紀アメリカ英語における“A long letter was sent him”型構文・再考』
The Non-prepositional Second Passive in 20th Century American English

藤内 響子

要 約
いわゆる授与動詞の3種類の受身文に関しては、アメリカ英語の特徴とするか否かでいくつかの文法書間で意見の対立がみられる。そこで本稿においては、20世紀から21世紀初頭のアメリカ英語文献を調査対象としてこの構文を調査し、現代英語と比較しながら、歴史的にはどちらの意見が言語の実態に近いかを明らかにする。

I
‘give’や‘send’のようにわゆる授与動詞には3種類の受身文が考えられる。例えば、She sent him a long letterの受身文は(1)のようなになる。

(1) a. He was sent a long letter.
    b. A long letter was sent to him.
    c. A long letter was sent him.

(1)の3つの受身文のうち、aは間接目的語を主語に取る構文であり、bおよびcは直接目的語を主語に取る構文である。それぞれ、主語にならなかったほうの目的語は、保留目的語として文中に残る。このうち、bとcに関して、いくつかの文法書間で意見の対立が見られるため、調査を行い、結果を藤内 聡 で述べた。

その内容を簡単にまとめると次のようになる。文法書間の意見の対立は、いずれかが誤っているということではなく、20世紀以降の数十年で、アメリカ英語において特にa型が失われた状況が生じた為に発生した可能性が高く、その変化はb型が深く関わっていると考えられる。そこで、新たに、20世紀以降のアメリカ英語におけるa型の変遷、および、イギリス英語における3型の状況について調査する必要が出てきた。その後、藤内 聡で、20世紀のアメリカ英語におけるa型の状況を調査してみた。本稿においては、更に現代英語における調査を併せて考え、アメリカ英語における“A long letter was sent him”型構文について再考してみたいと思う。

調査に用いたテキストは、20世紀から21世紀初頭までの合計20点である。2)に刊行年代順に挙げる。
調査した動詞は、授与動詞のうち、間接目的語を文末に移動した場合に to を要求するものであり、A.S.Hornby: A Guide to Patterns and Usage in English 等を参考にして選んだ。調査結果をまとめたものが(3)の表1である。括弧内の数字は、保留目的語が代名詞である例を示し、ている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1</th>
<th>a型</th>
<th>toあり</th>
<th>toなし</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>afford</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
</tr>
<tr>
<td>allot</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
</tr>
<tr>
<td>allow</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
</tr>
<tr>
<td>award</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>bring</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>deny</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>do</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>fetch</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>forbid</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>give</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>grant</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>hand</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>lend</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>offer</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>owe</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>pass</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>pay</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>permit</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>proffer</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>promise</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>read</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>refuse</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>render</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>restore</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>sell</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>send</td>
<td>✓</td>
<td>✓</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>show</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>spare</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>teach</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>tell</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>write</td>
<td>✓</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>全用例</td>
<td>a型</td>
<td>toあり</td>
<td>toなし</td>
</tr>
</tbody>
</table>

全用例 a型のうち、a型は a型、toあり、toなし a型である。現在では、3種類の型の中で最も自然
な形とされている Ø 型は、他の 2 つよりも遅れて登場し、Ø 型は世紀から良く使われるようになったとされているが、Ø 型の段階ですのに他の 2 つと遅色なく使用されていることがわかる。また、括弧内に目を向けみると、Ø 型の用例のうち実に 9 割以上が保留目的語に代名詞をとっており、主に代名詞用の構文という側面を持つことも分かる。

表 1 と比較するために、Nothing But You という、□□□年発行の□□□人の作家の手からなる短編集を現代英語のテキストとして用いた。調査の結果は、(4)の表 2 の通りである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>表 2</th>
<th>Ø 型</th>
<th>to あり</th>
<th>to なし</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>allow</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>deny</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>forbid</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>give</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>hand</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>offer</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>pay</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>refuse</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>sell</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>send</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>tell</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
<td>Ø</td>
</tr>
</tbody>
</table>

残念ながら、全部で□□□例と用例数は余り多くないで、断定は困難かもしれないが大体の傾向は確認できると思われる。その□□□例中、Ø 型が□□□例と全体の約 8 割を占め圧倒的である。Ø 型は 6 例、一方、to のない形式である Ø 型は、保留目的語が代名詞である用例があるにもかかわらず、一例も存在していない。

表 1 と表 2、2 つの表を比較すると次のよう